炎の暦

森 与志男

炎の暦

森　与志男

森　与志男（もり　よしお）

1930年生まれ

日本民主主義文学同盟常任幹事

主な著書「荒地の旅」（新日本出版社）

「傷だらけの足」（新日本出版社）

「時の谷間」（新日本出版社）

「校長はなぜ死んだか」（あゆみ出版）

炎の暦

1987年8月20日　初　版©　　定価　2200円

著者　森　与志男

発行者　山本　功

〒151　東京都渋谷区千駄ケ谷4—25—6

発行所　株式会社　新日本出版社

電　話　東京（423）8402（営業）

（423）9323（編集）

振替番号　東京　3—13681

印刷　壮光舎印刷　　製本　小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01538-8 C0093

炎の暦

装画　今井繁三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

「『蒼氓』がムービーになったってね。どうだった。きわは、見たんだろう」
兄の芳雄が、幾分声を低くして言ったのは、この五月の面会のときのことだった。
兵営の裏手の山の緑が午後のやわらかな陽に照り映えていた。「蒼氓」は、石川達三の小説で、一昨年第一回の芥川賞を受賞したのだが、それが映画化されたことを芳雄は言っているのだった。喜和は、首を横に振った。そんなことより、重箱に詰めてきたぼた餅を、せっせと食べてくれればいいのに、と彼女は思っていた。
「そうか。それは残念だな。もっとも来春は卒業だからな。活動をみているひまなんかなかったわけだ」
軍服姿の意外と似合う芳雄はおだやかな笑顔をうかべた。実務家肌の彼は、南米への移民を描いたこの小説の文芸的な面よりはむしろ作品のもつ社会性に興味をひかれたのだろう。喜和は、映画をみていてそのあたりのことを話してあげられたらどんなによかったろうか、と思った。
結局、あれが、入営した部隊での最後の面会になったのである。
「きわ、きわ、支度は出来たのかい」
階下からしのの、高い声がのぼってくる。
「とっくに出来ているわよ。お母さんこそどうなの」
せっかちなくせに手の遅いしのは、人のことばかり気にして、自分の支度は少しもはかどらないのである。

「出来たのなら、下りてきて手伝ってくれたらいいじゃないの」
喜和には、肥えた身体を不器用にひねりながら帯をまきつけている母親の様子が眼にみえるようだった。それに答えずに兄の部屋に入り電灯をひねった。主人のいない部屋は整頓され過ぎている。指先で机の上をそっと掃いてみても、塵一つつかないのは、しのが毎朝、丹念に拭き掃除をするからであった。
読書家ではなかった芳雄の書棚には、スポーツ関係の本とわずかな文学書のほかは、中学を出て証券会社に入社してから急に増えた経済や時局に関する書物が、雑然と並んでいるだけであった。
窓の外の暗い往還は、ときたま走り過ぎる車や、二、三人連れ立って声高に話しながら下駄の音をたてていく通行人があるほかは、夏のなごりのしめっぽい闇に沈んでいた。喜和は硝子戸をしめカーテンを引くと、階下におりていった。
それからひととき、しの一流のあわただしさにまきこまれて、出支度にせかされているうちに、父親の市蔵が帰ってきた。
「おい、車が来ているんだぞ」
彼は、店の上り框から声をかけたが、返事をするものがいないのであがってくると、座敷のなかの様子に眼をまるくした。
「お前たち、なにをやっているんだ。芝居見物に行くんじゃないんだぞ」
それもそのはずで、大きな卓袱台の上には五目寿司や煮しめの入った重箱がおかれている。小皿は紙に包んだか、箸は忘れていないかと、しのの言ういちいちの指図に、喜和と女中の稲子が追いたてられているのだった。
「芝居見物だなんて、あんたこそ今頃まで何処へ行ってたのさ」
気の立っているしのは、日頃になく市蔵に食ってかかった。金糸たまごと焼きのりをたっぷりかけ

た五目寿司は、芳雄の好物である。こんなことはとうてい口には出せないが、もし芳雄に万が一のことがあったなら、好物を口にするのも、これが最後になるかも知れないのであった。そんなしのの心のうちは、すぐに市蔵にも通じたらしく、彼は、

「とにかく早くしろ。せっかく用意したって間にあわなければ、なんにもならないぞ」

とひっこんだ言い方をした。

喜和は、二人のやりとりを聞いているうちに、次第に不安になった。もし、本当に間にあわなかったらどうしよう。列車の窓から半身を乗り出して、ホームを往来する人々の群に眼を走らせている芳雄の姿が、喜和の脳裡に浮び胸がどきどきした。

「さ、いねちゃん、お重を包んで」

自分は魔法びんにお茶を注ぎながら、彼女はしののかわりに稲子をせきたてた。

去年の六月、本籍が福島にあるため、芳雄は仙台の騎兵第二聯隊に入営した。兵科は騎兵である。面会日に会いに行くたびに、背が高くやせぎすの芳雄に肉がついて、逞しい兵士に錬えあげられていくのがわかった。栗毛の馬にまたがりサーベルを胸もとにひきつけた写真が送られてきたのは、あの五月の面会があった翌月のことである。

七月七日に蘆溝橋で日支両軍が衝突するという事件が起ると、近衛首相は、内地三個師団を華北へ派遣することを命じ、七月末には北支で総攻撃が開始されていた。

「どうやら、芳雄ももっていかれそうだな。いや、もしかしたらもう戦場にいるのかも知れん」

朝食のとき、市蔵が新聞から顔をあげると、食卓の誰にとなく言った。

「お国の為だとはいっても、死んじまったらなにもならないからな」

夫が新聞を置いて箸をとると、待ちかねたように、しのはそれを引きよせて、眉をよせて紙面をみた。彼女はこれまで決して新聞を読むことのない女だった。

ところがもう国内にはいないと思われていたその芳雄から、人伝えではあるが、連絡が届いたのである。極秘だが、芳雄たちの部隊は九月末日に仙台を出発し、深夜、東京のT駅で二時間程途中停車する、という内容だった。恐らく部隊長の暗黙の了解のもとに伝達させたものだろう。九月末日といえば、二日後のことであった。

「言うなよ。誰にも言うな。言えば、会えるものも会えなくなる」

市蔵がきびしい顔で家族に言い渡した。

しのの足が地につかなくなったのはそれからである。

支度をおえて外へ出てくると、店の前の路上に黒い大きな車が止まっている。帽子をかぶった運転手がすぐ煙草を踏み消してドアをあけた。

「栄町の方は大丈夫なんだな」

「へえ、念のため、さっき常吉をやりましたら、豊次さんは、あちらから真すぐT駅へ行くそうです」

と番頭の鈴木が、助手席に乗り込んだ市蔵に答えた。

姉の佐和と夫の相澤豊次は、バスで二つ停留所の離れた栄町に小さな世帯を持っていた。

「とにかく急いでくれ」

市蔵は運転手に言ってから、確かめるようにうしろ席をふりかえった。

車が動き出してから、喜和は、シートに身を沈めて、窓の外を流れていく暗い街に眼線を投げていた。八ツ山橋を越えて品川の駅をすぎると、車の通りは急に多くなった。それでも信号のほかは止まることなく順調に走った。

中国ではじまった戦は、思いあがった支那兵を皇軍が懲しめれば半年もしないで終るだろうと、街の人たちは言っていた。

それを煽るように、新しく誕生した政府は、各界の挙国一致を呼びかけ、南京政府の断固膺懲を声明した。海軍航空隊は、南京への渡洋爆撃を行ない、陸軍は上海派遣軍の編成をいそいでいる。喜和には、こうした政府と軍のあわただしい動きが、街の楽観論をよそに、芳雄だけでなく、喜和たちの運命にも大きく働きかけずにはいないように思えてならなかった。

「大丈夫かな」

と市蔵が運転手に聞いている。新橋から銀座通りに入ると、さすがに車の数もふえて、流れがしばしば渋滞した。

「なあに、この程度ならすぐ抜けられますよ」

運転手は前をむいたまま答えた。

「きわ、高群さん、来てくれるかしら。ちゃんと時間を知らせてあるんだろ」

しのが思いついたように言った。

「大丈夫よ。いやね。これで三度目よ」

「そうかね、なら、いいけど」

喜和は、わざと冷たい調子で母親に答えながら、さっきから戦場に行く芳雄のこと以上に、高群學のことを考えている自分の心に内心顔を赤くした。

勤め先の小学校に電話したとき、學は、

「いよいよですか」

と重い声で言い、それから時間を再確認してから、必ず行きます、と断言したのである。その声の響がいまも喜和の胸の中にのこっていた。

車は湯島の聖堂の横の坂をのぼり、本郷の街並を走った。大学の樹木が黒々とした陰をつくっている。動坂を下ると、再び登り坂にかかった。

「これを登り切って、また下ったところがT駅ですよ」
と運転手が言った。市蔵は火をつけかけた煙草をおろして身を起した。両側には高い崖が立って視界をせばめている。車は大きな音をたてて走った。やがて坂を登りきり、少し右に廻りながら下っていくと、急に前方が大きく開けた。まるで無数の漁火のうかぶ夜の海を見るようだった
「Tの操車場だな」
と市蔵が言った。運転手はそれに答えずに坂を下り切ったところで車を止めた。市蔵に続いて車から下りた喜和は、店舗はおろか人家すら見あたらない殺風景なあたりを眺めまわした。道路のむこう側には、いま切り通しをぬけてきた山の端が高い崖となってそびえ、その下にうずくまったようにT駅の駅舎があった。
「なんだか淋しいところだね」
車が前方の陸橋の方へ去ったあと、しのは両手に荷物をさげた姿で不安そうに言った。
芳雄の出征のときは、幟を二、三十本も立て、町内総出で日の丸の小旗をふりながら駅まで送って行った。そこまでいかぬとしても、一部隊の軍人とその家族が送迎する場所にしては、ここはいかにも寂寥としているのである。
「とにかく中へ入ってみよう」
と言う市蔵のあとについて道路を横切り駅舎の方へ行くと、ちょうど電車が着いたらしく、こうした時間には思いがけない大勢の乗客が、低いところにあるホームから階段を登ってくるのだった。
「お父さん、ちょっと待って」
喜和は入場券を買おうとしている市蔵に声をかけた。改札口を通っていく人々の様子が喜和の注意をひいたのである。その人の群は、日頃この駅を通勤などに使っている人たちには見えなかった。なにより人々の年齢が雑多なことである。子供もいれば年寄がいる。なかでも赤子を背負ったり、抱い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たりした女たちが多い。それが家族らしいかたまりになって道を急いでいるのだった。ふりかえって自分たちを見れば、まちまちの服装といい、手にさげた風呂敷包みといい、それらの人の群に入ったとしても少しもおかしくないのである。

「お父さん、あの人たちも見送りなのよ」

「うん。そのようだな。しかし、いったい何処へ行くんだろう」

改札を出た人々の群は、下駄の音を響かせながら暗い陸橋にむかって歩いていくのである。そのとき、大声で喜和の名を呼ぶものがあった。声の方を見ると、道路の向うで高群學が手をあげている。彼は車一台をやりすごすと、すぐ喜和のところへ走ってきた。

「やあ、高群君か」

市蔵もほっとした表情でむかえた。

「それより、早く行きましょう。佐和さんたちもあちらで待っていますから」

彼は、しのの手から風呂敷包みをとると、みなをうながした。

「こちらの方がすいているんです」

人々とは別に、橋の左手の方に向かいながら學は言った。この、広大なT駅操車場を跨いでいる橋は、真中に車道を通して人道を左右にわけているのだった。橋の上から見渡す操車場は、無数に走る線路や青や赤の信号灯、そして、あちこちにかたまっている貨車とともに、構内灯の光で明るくうきたって見える。そのむこうには、おそらく荒川と隅田川あたりまで続いている軒の低い家並が、塗りつぶしたような闇となって広がっていた。

橋がつきると、道は二又にわかれている。というより、右へ大きく下る本道から、人の通るだけの脇道が左へおりているのだ。學はその脇道をとった。

「暗いですから、足元に気をつけて下さい」

下からは強い風が吹きあげている。喜和は着物の褄をおさえて、高い學の背を見ながらあとからついていった。

面会は、操車場の一隅の、貨物駅に使用されている舗装された広場で行なわれているらしい。すでに出征軍人をかこんだ家族や知人の輪があちこちに出来ていた。構内灯の光があるといっても、やっと顔を判別出来る程度の明るさである。そのなかでいかにもひそやかによりそっている人々の群々を見たとき、喜和の胸には一瞬名状しがたい悲哀がかすめた。だが、いまはそんな感傷にとらわれているときでなかった。

あとからあとから操車場に入ってくる人々は、構内に黒く長くのびている軍用列車に向かってわれさきに走っていくのだった。列車には、まだ家族とあえない兵隊たちが窓から首を突き出していた。

「佐和さんのご主人が、芳雄に会えたらあの建物のところへ連れてくると言ってました」

學は、運送会社のものらしい建物を指差して言った。だが、そのあたりには人影がなかった。まだ会えずにいるのだろう。

「よし、お前たちは荷物をおいてあそこで待っていろ」

市蔵はそうしのに言うと、列車にむかって走り出した。喜和と學がそのあとを追った。もう夢中だった。

線路下から見上げる車輛は、まるで二階家を見上げるような高さである。その窓から兵士たちの顔が重なりあって見おろしていた。そのどれもが暗い陰のなかにあった。

「きわさんは、右へまわって下さい。ぼくは左へ行きます。端まで行ったら戻ってくるんです。会えた方がその場所で待つ、いいですね」

學が大声で言った。あたりは肉親をさがす人々の叫び声でわきかえっていた。

「××部隊の〇〇はいませんか」

「××部隊ならもっと先だ」
子供をだいた女や老人が、兵士たちの顔を仰ぎ見ながら駈けていくのである。喜和も走り出した。走り出してみると、いまにも列車が動き出すのではないかという焦燥感が胸をつきあげるのである。
「○○部隊の上田芳雄二等兵はいませんか」
喜和は、いまは恥も外聞も忘れて、黒いかたまりとなっている兵士たちの顔にむかって叫んだ。
だが、列車の先まで行っても、芳雄と会うことは出来なかった。少し離れたところに巨大な機関車が止まっていて煙と一緒に火の粉をふきあげている。喜和は、不吉なものを見たようにどきっとした。そのさらに先の方には、機関庫らしい大きな建物があり、そこから別の機関車がカンテラをもった作業員をのせてゆっくりと出てくるところだった。機関車の内部はなぜか燃えるように赤く染まっていた。
「ああ、こうしてはいられない」
彼女は小石に足をとられながら、もと来た方向へ戻りはじめた。
さっき、學と別れたあたりまで来たとき、一つの腕がのびてきて、彼女の肩をとらえた。力あまって、相手の胸の中にとびこんだような恰好になって見上げると、そこに芳雄の顔があった。
「まるで馬車馬じゃないか」
とその顔が笑っている。そばに學も市蔵もそして義兄の豊次も立っていた。
「だって……」
そう言って喜和は、自分の感情の整理がつかないまま、掌で顔をおおってしまった。
「ごめん、ごめん一生懸命さがしてくれたんだものな」
芳雄の声がやさしく喜和をつつんだ。

「とにかくむこうに行こう。しのと佐和が待ちかねている」
と市蔵にうながされて、みなは芳雄を囲むようにして、運送会社の建物の方へ歩いて行った。芳雄の話によると、仙台を出てから、途中福島でも同じような形の面会が行なわれたという。だが、おそらくここが最後で、列車は真すぐ宇品の軍港へ向かうだろうと言った。
あるだけの新聞紙をひろげて、持参した重箱を中に座ってみると、思っていたほど話がはずまないのであった。
しのは、怒ったように黙りこくって、まるで仕事のようにたべものをとりわけている。
「そんなことはいいから、何か話したらどうなんだ」
たまりかねて市蔵が口を出したが、その彼も、日頃になく自分自身をもてあましているのだった。
一番自然なのは、これから戦場へ行く芳雄だった。佐和の夫で、医療機器を商う問屋の番頭をしている豊次と話している。豊次は如才のない口調で応じていた。
「芳雄さんのあとに続いて、あたしやこの高群君なんかもすぐ行きますよ。もっとも支那が相手の戦(いくさ)ですからねえ、案外あっさりと片がついてしまうかもしれませんな」
「いや、なかなかそうはいかないでしょう。中国は決して馬鹿に出来ませんよ」
と學が率直な調子で言った。
「へえ、そうですかねえ。まあ、勝って兜(かぶと)の緒を締めよってやつですね」
豊次は軽薄な調子で応じた。喜和はこの義兄を好きになれなかった。いくら商売に才覚があるといっても、人間的な味わいの薄いこの人に、短歌の会の同人でもあった姉がよく嫁ぐ気持になったと、喜和は不満なのである。その佐和は、ほとんど無表情な顔でしののそばに座っているのだった。
「ところで学校の方はどうだ」
芳雄は、話をひきとるように、學にたずねた。

「うん、まあ、なんとかやっているよ。次弟に堅苦しくなっているがね」
「例の研究の方も続いているのか」
「細々とだが、なんとかやっている」
「そうか。しかしあまり深入りするなよ。これからの世の中は大変になるぞ」
「それは十分わかっているつもりだ」
兄と學のさりげない会話には、二人だけにしか通じない深い意味がこめられていた。それを曲りなりにわかるのは、この場では、自分だけだと喜和は思っている。それは、兄の部屋に學が遊びに来るたびに、ときには激しく、ときには深刻な調子で交わされる議論に、わからぬまに熱心に耳を傾けていたからだった。
こうしているうちにも時間はまたたくまにとび去っていった。しのにしても市蔵にしても言いたいことが山のようにあるのに、気持ばかりが先に立って、なにも言えずにいるのだった。彼らの顔にはいたずらに時が過ぎていくことへのいらだちがあらわれていた。
「あ、汽車だ」
と近くで子供の高い声がした。みるとさっきまで先頭についていた機関車が姿を消し、かわりに車庫から出て来た機関車が、小旗をもった操車係の誘導でゆっくりとバックしてくると、列車から、四、五米離れたところで止まり、短い汽笛を鳴らした。
「間もなく出発だな」
と市蔵が言うと、しのがおろおろした。
「支那ってところは寒いんだろうね」
それでも彼女はやっとの思いで言った。
「馬鹿だなあ、お前は。支那はだだびろい国だぞ。雪と氷ばかりの北満から、南は、ジャングルのあ

る広東までひろがっているんだ」
「じゃあ、その広い支那のどこへ連れていかれるのよ。南か北かくらい、わかりそうなものじゃないの」
「それは軍の機密だよ。第一、わかったってそんなことが言えるものか」
「たぶん、南ですよ」
父と母のやりとりを笑いながら聞いていた芳雄が言った。
「兵隊のあいだでは、もっぱらそんな噂です」
「南って、どのあたりかね？」
としのは、幾分ほっとしたように言ったが、それには芳雄は答えなかった。
やがて、列車の方で一つの声がした。すると、それはたちまち「乗車」という号令となって列車の上を走っていった。家族にかこまれていた兵士たちは、弾かれたように立ち上がると、列車の方へ走っていく。
「じゃあ」
と芳雄は、家族の顔を見まわした。市蔵としのは身を固くしてその顔を見つめている。
「武運を祈ります」と豊次が言い、學が、「死ぬなよ」と低いが強い声で言った。
芳雄は、そのいずれにも答えずに、足を引きつけると軍人らしく敬礼してから列車の方へ走って行った。
たちまち各車輛の入口には黒い兵士の山が出来た。ステップのところにいる兵隊が、次々とそれをひきあげていく。黒い山はまたたくあいだに小さくなり、やがて、線路わきには、見送りの家族だけがのこされた。
「列車から離れて下さい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.